

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘、応援する

「Tokyo Midtown Award 2016」 結果発表

受賞作品展示：10月14日(金)～11月6日(日)

東京ミッドタウン(事業者代表 三井不動産株式会社)は、「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街をコンセプトに街づくりを進めています。その活動の一環として今年で9回目の開催となる、「Tokyo Midtown Award 2016」において、この度、計1,492作品の応募作品の中からグランプリ2作品を含む受賞作品14作品が決定しました。

【Tokyo Midtown Award 2016 グランプリ受賞作品】

＜アートコンペ＞

テーマ: 応募者が自由に設定

作品名: 『意識の表象』

受賞者: 後藤 宙

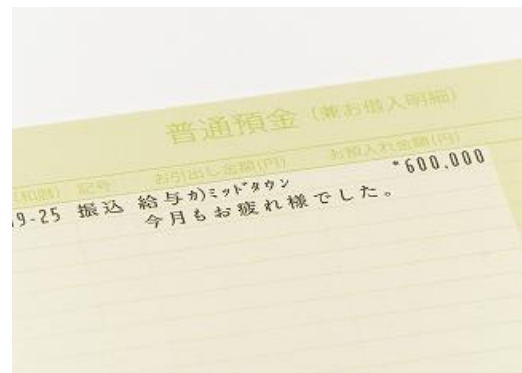


＜デザインコンペ＞

テーマ: Anniversary

作品名: 『おつかれさま通帳』

受賞者: 小川 貴之 / 市川 直人



受賞作品14作品は、10月14日(金)から11月6日(日)までの約1ヵ月、東京ミッドタウンのプラザB1オープンスペースにて展示します。また、期間中、来街者の一般投票で人気作品を選出する「オーディエンス賞」も実施し、結果は11月11日(金)に東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。

また、2017年3月30日、東京ミッドタウンは開業10周年を迎えます。開業以来のコンセプトである「JAPAN VALUE」を創造、結集し、世界に発信しつづける街をさらに発展させていくために、10周年の活動のテーマを「JAPAN, THE BEAUTIFUL」といたしました。10周年の期間を通じ、この美しい日本の価値・感性・才能を発信するべく様々な活動を展開してまいります。

■ 掲載時の一般の方のお問い合わせ先 ■

東京ミッドタウン・コールセンター

TEL: 03-3475-3100

東京ミッドタウン・オフィシャルサイト

<http://www.tokyo-midtown.com>

Tokyo Midtown Award 特集ページ

<http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/>

Tokyo Midtown Award 2016 <アートコンペ> 受賞作品

<アートコンペ>では、テーマは応募者が自由に設定するものとし、東京ミッドタウンの街路に設置することを意識して制作いただき、サイトスペシフィックな作品を募集しました。応募者自身が設置場所を選び、作品を提案できる自由さがある一方で、商業施設に作品を置くパブリックアートとしての構築や自身のテーマを厳しく問われるコンペです。

応募のあった243作品の中から2次審査を通過した6名の入選者には、制作補助金100万円が支給され、実際に東京ミッドタウンで作品を設置しました。10月4日(火)に最終審査を行い、各賞が決定しました。今年は審議の結果、特例として準グランプリを2作品選出いたしました。

グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History が実施するアートプログラムへ招聘されます。

■ グランプリ

受賞作：『意識の表象』(いしきのひょうしょう)

受賞者：後藤 宙(ごとう かなた)

略歴：学生(東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻 在籍) / 東京都生まれ、東京都在住



<作品コンセプト>

今回の作品『意識の表象』は、これまで制作をしてきた糸を使った彫刻作品シリーズの延長上にありながらも、絵画的な視点を持ち込んだものです。幾何学や黄金比、トラス構造などと対話してきたこれまでの制作から、自分の中に表象として浮かんできたものを、ドローイングによってすくい上げました。象徴的であり、視覚的な現象を纏った今作が、多くの人の目に言語外のメッセージを刻むことを願います。

■ 準グランプリ

受賞作：『Twistripe』(ついすとらいぷ)

受賞者：大塚 功季(おおつか こうき)

略歴：学生(愛知県立芸術大学大学院 美術博士 前期美術専攻 油画・版画領域 在籍)
佐賀県生まれ、愛知県在住



<作品コンセプト>

都市全体から感じられる圧倒的なパワーは、植物が持つ躍動感や力強さと似ています。それは東京という都市が、植物のように「成長」をつづけているからです。

そして「工事中」の象徴であるトラロープから生み出された有機的なこの作品は、都市と植物、双方のイメージを併せ持ちます。そこに、成長しようとする意志のようなものを感じてもらえたら、と思います。

■ 準グランプリ

受賞作：『波と椅子』(なみといす)

受賞者：山口 正樹(やまぐち まさき)

略歴：美術家 / 彫刻家(多摩美術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修了)
千葉県生まれ、東京都在住



<作品コンセプト>

存在や安定をイメージさせる椅子と、連続するエネルギーである波。この相反する2つのイメージが、1つの造形物として拮抗しつつバランスを保っている彫刻作品です。ガラスを使用することで、公共空間と作品の関係を透明にし、そのことがかえって人々に違和感を与えることでしょう。この作品は東京ミッドタウンという場所に、いつもと違う独特な空間が生み出されるように考案したものです。

■ 優秀賞

受賞作：『時を纏う』(ときをまとう)
受賞者：齋藤 詩織(さいとう しおり)
略歴：学生(東北芸術工科大学芸術学部
洋画コース在籍)
栃木県生まれ、山形県在住



<作品コンセプト>

服は着ていた人の記憶や想いを詰めた抜け殻。そして人は服を纏って社会に所属し生活を送る。実家に残っていた高校の制服を見た時にそれだけが当時のまま変わらずに存在し、自分だけが時を刻んでいるように感じました。服に残る傷や汚れからは、過去の記憶を呼び私に大切な何かを訴えかけてきます。

■ 優秀賞

受賞作：『底なしの渴き』(そこなしのかわき)
受賞者：副島 しのぶ(そえじま しのぶ)
略歴：学生(東京藝術大学 先端芸術表現科
在籍)
広島県生まれ、茨城県在住



<作品コンセプト>

人々の行き交う場所に、まるで忘れ物のようにぽつんと置かれた紙袋。
道行く人の視線が向けられるその紙袋の中には一体なにがあるのか。
満たされた水、底に続く深い穴。
その不安定な風景に、あくなき欲望を垣間みる作品です。

■ 優秀賞

受賞作：『稜威母』(いずも)
受賞者：FUKUPOLY(ふくぼり)
略歴：映像デザイナー(武蔵野美術大学造形学部
建築学科修了)
群馬県生まれ、東京都在住



<作品コンセプト>

「稜威母」とは日本の女神 イザナミの別称です。出雲の国の「いずも」の語源とも言われています。
枯れた盆栽から流体シミュレーションによって生成された「空気の彫刻」は、生と死、現実と虚構の中を曖昧に漂う「雲」のような作品です。

※募集概要は 9P をご確認ください。

Tokyo Midtown Award 2016 <デザインコンペ> 受賞作品

<デザインコンペ>の今年のテーマは、「Anniversary」。2017年春に東京ミッドタウンは10周年を迎えます。そして、わたしたちの周りには、様々な記念日があります。そんな“アニバーサリー”を彩る、日本の心づかいが感じられるような作品を募集しました。

その結果、多種多様な視点から考えられた「Anniversary」を表現するデザイン1,249作品の応募がありました。応募作品の中から、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“売り場の意識(消費者ニーズの理解力)”、“商品化の可能性”に加え、なによりも“デザイン力”を基準に応募シートを審査後、意匠権調査を経て、グランプリ・準グランプリ・優秀賞・審査員特別賞の計8作品が決定しました。

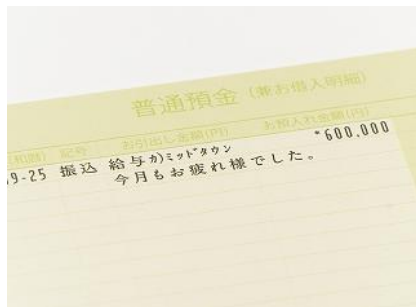
グランプリ受賞者を来春、国際家具見本市「ミラノサローネ」開催中にイタリア・ミラノへご招待します。また受賞作品には、今後継続的に商品化等のサポートを行う予定です。

■ グランプリ

受賞作：『おつかれさま通帳』

受賞者、略歴：

- ・小川 貴之（おがわ たかゆき）
デザイナー / 2013年多摩美術大学卒業
東京都出身
- ・市川 直人（いちかわ なおと）
コピーライター・CMプランナー
2008年国際基督教大学卒業 / 東京都出身



<作品コンセプト>

会社が個人に給料を振り込む際に、「給料」や「給与」といった取引内容欄に「今月もお疲れさまでした。」という一行を加えることができるサービスです。ほとんどの場合、口座に毎月自動的に振り込まれる給料。そのせいで、そこには人が介在していないようにさえ感じられます。このサービスはたった一行の「お疲れさま」を通帳や取引内容欄に加えることで、働いてくれる人の1ヶ月の仕事に対する「感謝」の気持ちを同時に伝えてくれます。会社から個人へ。給料に添えて、ありがたい気持ちを送れば、なんでもなかった毎月の給料日が、ちょっとした記念日になります。

■ 準グランプリ

受賞作：『おめでたい紙コップ』

受賞者、略歴：

- ・井下 悠（いのした ゆう）
デザイナー / 2001年九州デザイナー学院卒業
大分県出身



<作品コンセプト>

記念行事やおめでたい日に掲げる紅白幕の模様の紙コップです。パーティの席などで、飲み物を注ぐ前に並べておけば、その場を華やかに演出しますし、乾杯の時に紅白の柄が集合すると、一層盛り上がります。この紙コップに注がれた飲み物を飲むだけでも、ありがたい気さえてきます。

■ 優秀賞

受賞作：『数字になるチョコレート』

受賞者、略歴：

- ・小田 裕和（おだ ひろかず）
大学院生・大学職員 / 千葉工業大学大学院工学研究科在籍
神田外語大学職員
千葉県出身
- ・深地 宏昌（ふかじ ひろまさ）
デザイナー / 2015年京都工芸繊維大学大学院修了
大阪府出身



<作品コンセプト>

ならびかえて好きな数字を作るチョコレートです。生まれて何年、出会って何年、始まって何年…、記念日は「数」を感じる日。そんな特別な日にチョコレートの数字を可愛く添えてあげてください。

<審査員特別賞>

■ 小山 薫堂賞

受賞作：『THE BIRTH』(ざ・ばーす)

受賞者、略歴：

- ・関戸 貴美子（せきど きみこ）
アートディレクター / 2010年多摩美術大学美術学部
グラフィックデザイン学科卒業
サンフランシスコ出身



<作品コンセプト>

このウィスキーボトルは、子どもの出生時体重と同じです。産まれたばかりの子どもをおそろおそろ抱き上げたときの感動を、そのとき感じた命のはじまりの重さを、ウィスキーボトルにして手元に残しませんか。子どもの誕生年に醸造されたウィスキーは、子どもと一緒に時を重ね、子どもが二十歳の誕生日を迎えるのを静かにそこで待っています。このウィスキーを、この重さを、これからの時間を、新しい命を授かるすべての二人に捧げます。

■ 佐藤 卓賞

受賞作：『MIZUHIKI PEN』(みずひき ペン)

受賞者、略歴：

- ・大垣 友紀恵（おおがき ゆきえ）
デザイナー・アーティスト / 2005年千葉大学大学院
デザイン専攻修了、千葉県出身
- ・松尾 拓弥（まつお たくみ）
デザイナー・エンジニア / 2005年千葉大学大学院
デザイン専攻修了、千葉県出身



<作品コンセプト>

水引を自由に自分のアイディアで描くことができる『MIZUHIKI PEN』。和の記念日にも、洋の記念日にも、型にとらわれることなく、贈り手や、受取り手の、その人らしい水引で、お祝いの気持ちを盛り上げることができます。また、お祝いの内容を具体的に表現すれば、ひとり一人のお祝いにぴったりとカスタマイズすることができ、真心が一層伝わります。日本人にも外国人にも、和の遊び心で、モダンに楽しんでいただけるように考えました。

■ 柴田 文江賞

受賞作：『HAPPINESIN』(はぴねしん)

受賞者、略歴：

- ・新美 宏樹 (にいみ ひろき)
アートディレクター / 2014年多摩美術大学
グラフィック学科卒業、愛知県出身
- ・浜田 智子 (はまだ ともこ)
アートディレクター / 2012年東京藝術大学
デザイン科卒業、東京都出身



<作品コンセプト>

日々の生活にちょっとした喜びを。出現したら少しだけ幸せになるホッチキスの針。その名も HAPPINESIN。針の中に一つだけ幸運の針が混じっています。それが出た日は、良いことがあるかもしれません。

■ 原 研哉賞

受賞作：『キャンドル付箋』

受賞者：ミッドナイトクラブ

略歴：

- ・Jananya Julsakrisakul (ジャンナーヤー ジュンサシサクン)
デザイナー / 一橋大学大学院 商学研究科
(MBA コース) 修了、タイ出身
- ・Vorakit Chuangmaneedechakij
(ウオラキット シュアンマニーデチャキット)
プロジェクトマネージャー / Rangsit University 卒業
タイ出身



<作品コンセプト>

最も身近な記念日である誕生日。会社や学校で上司や同僚、友人の誕生日を祝いたいけれど大掛かりなサプライズはちょっと照れくさい。そんな奥ゆかしいあなたにおすすめしたいのがこの「キャンドル付箋」。ちょっとしたプレゼントに貼ってもよし、ぺたぺたと机に貼ってもよし。貼れば貼るほどインパクト大。もちろん付箋なのでお祝いのメッセージも添えられます。まわりの仲間を巻き込んで、気軽なサプライズをしてみませんか？

■ 水野 学賞

受賞作：『切子プラカップ』

受賞者、略歴：

- ・築地 彩水 (つきじ あやみ)
学生 / 千葉大学工学部在籍、東京都出身
- ・吉岡 健一郎 (よしおか けんいちろう)
学生 / 千葉大学工学部在籍、東京都出身



<作品コンセプト>

折角の記念日は特別な日にしたい！特別なハレの日を感じさせる切子も、プラスチックカップなら気軽にパーティーに使えます。

＜アートコンペ＞ 審査員総評



Photo by
Takaaki Koshiba

■ 川上 典李子 / Noriko KAWAKAMI

(ジャーナリスト / 21_21 DESIGN SIGHT アソシエイトディレクター)

本コンペの審査に初めて参加し、社会とアートの関わりについてやパブリックアートの可能性など、審査員がたっぷり議論を交わす実に重要な場であることを実感しました。そのなかで私自身、アートとは何か、それも東京ミッドタウンにおけるアートは何か、と自問自答を繰り返しながら意欲的な提案を拝見してきました。テーマを自由に設定できるということは、各々の問題意識や日頃の取り組みが如実に現われるということです。それが本コンペの重要な点であり醍醐味で、それが弱い人は作品もやはり魅力に欠ける。今回のグランプリと準グランプリは私も納得のゆく結果で、実力と同時に可能性がにじみ出ている方々を選出できたと思っています。今後さらに飛躍していただくことに期待しています。



■ 児島 やよい / Yayoi KOJIMA

(キュレーター / 十和田市現代美術館副館長 / 慶応義塾大学、明治学院大学、学習院女子大学非常勤講師)

まず、書類審査でいつも悩むのですが、一人で大量の応募書類を読みながら、この人はどういう作家か、どういう考えで作品を作りたいのか、判断していくのは難しい。今年は特に書類審査が難しかったのですが、結果として審査員全員によって選ばれた作品は、テーマ、表現やメディアから多様性をとても感じられました。このコンペの可能性、そしてアートの可能性もまだまだ広がっていくと、期待をもてる年になったと思います。今回のグランプリと準グランプリ、3人のそれぞれ方向性の異なる方々を選ぶことができたのも良かった。応募されたみなさんの、さらなる頑張りには期待しています。



Photo by
Herbie Yamaguchi

■ 清水 敏男 / Toshio SHIMIZU

(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

東京ミッドタウンの公共空間に作品を置くというのは大変難しいものですが、今回最終審査において上位3位を占めたものは存在感を強く出すことに成功していました。その理由はおそらく自己の表現を追求する姿勢が強く、その結果作品の存在感が十分に発揮されたのではないかと思います。やはり作家としての意志の強さがあったと思います。そこで準グランプリは甲乙つけ難いということで2名授与することとなりました。上位に届かなかった作品はやはり、もう一押し足りないところがあったと思います。今後に期待したいと思います。



撮影：中川正子

■ 鈴木 康広 / Yasuhiro SUZUKI

(アーティスト / 武蔵野美術大学准教授
東京大学先端科学技術研究センター客員研究員)

今回初めて審査に参加しましたが、応募作品が予想以上に多様で、比べようのないものが一堂に会している状態に刺激を受けました。それに対応して審査員の人数が多いこともこのアワードの特徴だとあらためて理解しました。今回、上位に残った作品も、結果的にグランプリ・準グランプリという言葉で分類されましたが、特に同じく準グランプリに選ばれた2人の作家は全く異なる軸をもち、彫刻という概念では対極にあると言えます。ただ、その中でも同時代に生きる作家に通じる何かが見えてくるのかな、とも思えてきます。そういった、異質なクリエイションが見つかる現在地に立ち会うことができ、僕自身も学ぶことが多かったです。このアワードそのものがひとつのパブリックアートとして、東京ミッドタウンに新鮮な息吹を呼び込む装置となっていることを垣間見る機会になりました。



■ 土屋 公雄 / Kimio TSUCHIYA

(彫刻家 / 愛知県立芸術大学教授 / 武蔵野美術大学客員教授)

我々はかつてないテクノロジーの時代に生きています。アートは手の中から、あるいは身体から生まれてくる創造の世界だと思っています。だからこそ、Tokyo Midtown Award で選ぶ作品については、そのフィジカルな部分は絶対に必要なものだと思います。今回最終選考まで残った作品は、どれも手と頭の間から生み出された、象徴的な作品であり、今後の我々の未来を考える上でも大切なものです。それをこの東京ミッドタウンという、大都市東京のど真ん中から発信するということに、さらなる意味が生まれるのです。



Photo by Miura Haruko

■ 中山 ダイスケ / Daisuke NAKAYAMA

(アーティスト / アートディレクター / 東北芸術工科大学グラフィックデザイン学科教授)

毎年、応募書類を時間をかけて読みますが、今年の風潮としては、見慣れたものにひと手間を加えたようなものや価値の変換がコンセプトになっているようなものがとても多かった気がします。しかし、何百点もの応募作品を見ていると、レディメイドや何かのアレンジといったような元の形がわかるようなものよりも、これは何だろう？ どうしてこんなことを考えたんだろう？ と思うものに魅力を感じてしまいます。つくづくアートって一体何だろう？ ということを考えさせられるコンペでした。



写真: 米倉裕貴

■ 八谷 和彦 / Kazuhiko HACHIYA

(メディア・アーティスト / 東京藝術大学先端芸術表現科准教授)

今回は、ここ数年と比較して、全体的にかなりレベルの高い作品を選出することができたと思います。特に、グランプリ・準グランプリを選出するには正直、悩んだのですが、結果的には独創性と完成度の高い作品を最終的に選ぶことができたと感じています。また、グランプリ・準グランプリに選ばれなかった優秀作品にも、個々に光る部分があったと思うので、今後の作品の展開に期待するとともに、どこかの機会ですべてのみなさんにアドバイスできることはしたいと思っています。

<デザインコンペ> 審査員総評



photo by
Hiromi Shinada

■ 小山 薫堂 / Kundo KOYAMA

(放送作家 / 東北芸術工科大学教授)

かつて「広告は時代を映す鏡」と言われたことがあった。そして今、「デザインは社会の気分を映す鏡」であることは間違いない。今回の「Anniversary」という課題に対し、多くのデザイナーが同じことを考えた。「特別な日」をデザインでより特別に彩る・・・のではなく、「ありふれた日常」の中に、デザインの力で価値ある瞬間を生み出したい、という想いだ。

遠い憧ればかりを追い求めるのではなく、近すぎるが故に見えなくなっている“身近な幸せ”を再発見したいと思っている人が多いのかもしれない。たくさんの秀作を見ているうちに、背伸びしない生き方を教えられた気がして、今年の審査会はとても素敵な時間となった。応募してくださった全ての方、ありがとうございました。



■ 佐藤 卓 / Taku SATOH

(グラフィックデザイナー)

このコンペは、数多あるデザインコンペの中でも、毎年かなりユニークな作品が出品されてくるコンペです。真っ当な提案というよりも、何か心をくすぐる提案がいつも多く見受けられます。その理由は、最終的には商品として成立することを目指しているからでしょう。美しいだけでは、人はその物を自分の物にしたいとは思いません。自分の物にしたいと思う気持ちを、言葉にするのは難しいのですが、それはどこかに何らかの愛おしさを感じるものなのだろうと思います。それが「面白い」や「カワイイ」の感情に繋がっているのでしょうか。今年の出展作品は、ややおとなしい印象を受けたものの、賞が決まってみると、これがなかなか面白いのです。ぜひゆっくりご覧ください。



■ 柴田 文江 / Fumie SHIBATA

(プロダクトデザイナー / 武蔵野美術大学教授)

2016年のエントリーは、誰もが感じる「アニバーサリー」という概念の中に、デザインの切り口を見出そうとした作品が多かったように思います。既に人々に認知されているアニバーサリーのモチーフを展開するアイデアが、偶然にも数多く重なって提案されていたことは、このような日常的なテーマに対してオリジナルなデザインを生み出す難しさを感じさせました。そんな中であっても、これまでにない「アニバーサリー」のシーンを生み出す幾つかの作品は、慣れ親しんだ懐かしさの中に独自の世界観を表現していて、暮らしに根付きそうなりアリティィーが感じられ高く評価されました。



■ 原 研哉 / Kenya HARA

(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授)

お祝いもののアイデアというのは、世の中に無数にあり、その中で抜けよく、胸のすくようなアイデアを生み出すのは大変なことである。今回の審査は、当初、票が多数入っていたものが類似のチェックを経て、次々と選外になっていった。その中で、通帳の給与の入金欄の下に、「今月もお疲れ様でした。」の一言を記入するという案は、着想に高い独創性があり、そこに、評価が集まった。具体化できるかどうかは銀行次第であるが、どうか、頭のやわらかい銀行に採用してもらえると嬉しい。



■ 水野 学 / Manabu MIZUNO

(クリエイティブディレクター / 慶応義塾大学特別招聘准教授)

「デザインとアートの違い」について度々質問を受ける。僕は決まっただけで答えることにしている。「20 世紀前半頃までに制作され、現在美術館に所蔵されているアート作品の多くは、その美術館に飾られることを主目的と考えて作られていないものが多い。冬に枯れてしまう花を描いて部屋を飾ったり、お互いの肖像画をお見合い写真のように送り合ったり、遠近法などの技術の発明に役立てたり、布教活動などに用いたりしてきたものを後世の人々が美術館に所蔵した。つまり、本来の制作目的を考えれば、現代におけるデザインと同義だと思う」と。デザインというものは、いつの時代も変わらず、人々の心を動かすものでなくてはならないのだろう。自戒をこめて。

Tokyo Midtown Award 2016 募集要項

<アートコンペ>概要

テーマ : 応募者が自由に設定

応募期間 : 2016 年 5 月 12 日(木)~6 月 2 日(木)

審査方法 : 1 次審査(書類審査)→2 次審査(模型によるプレゼンテーション)→最終審査

審査員 : 川上 典李子

児島 やよい

清水 敏男

鈴木 康広

土屋 公雄

中山 ダイスケ

八谷 和彦 以上 7 名

協力 : TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

後援 : University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History

賞(賞金) : グランプリ(1 作品)----- 100 万円

準グランプリ(1 作品) ----- 50 万円

優秀賞(4 作品) ----- 10 万円

- 別途、入選者 1 人、または 1 組につき、制作補助金 100 万円を支給いたします。
- グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa の Department of Art and Art History が実施するアートプログラムに招聘いたします。(※1)
- 入賞者 6 名は来春の「ストリートミュージアム」に参加(※2)
- 2016 年度は審査の結果、準グランプリが 2 作品、優秀賞 3 作品に変更となりました。

※1 University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History について

歴史ある本プログラムは、これまで数多くのアーティストや学者が招かれ、ハワイの芸術文化に触れながら、各種のアートプログラムを行っています。受賞者には、実際にハワイに滞在し、ハワイ大学のアートプログラムに参加しながら作品を制作する機会が与えられます。

※2 東京ミッドタウンが春のイベントの中で開催する「ストリートミュージアム」(2017 年初春予定)での作品展示の機会が与えられ、新作の発表の場として活用できます。また、ワークショップなどの開催も可能です。

<デザインコンペ>概要

テーマ : 「Anniversary」

応募期間 : 2016 年 6 月 24 日(金)~7 月 25 日(月)

審査方法 : 書類審査

審査員 : 小山 薫堂

佐藤 卓

柴田 文江

原 研哉

水野 学 以上 5 名

協 力 : 東京ミッドタウン・デザインハブ、株式会社 JDN

賞 (賞 金) : グランプリ(1 作品)----- 100 万円

準グランプリ(1 作品)----- 50 万円

優秀賞(1 作品)----- 30 万円

審査員特別賞(各 5 作品)---- 5 万円

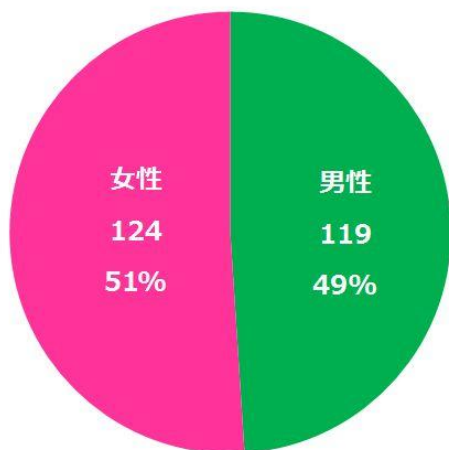
- グランプリ受賞者は毎年 4 月に開催される「ミラノサローネ国際家具見本市」開催中に、イタリア・ミラノへご招待いたします。(※1)
- 受賞後、商品化のサポートを行います。

※1 毎年 4 月に開催される「Salone del Mobile Milano / ミラノサローネ国際家具見本市」。世界最大規模の家具見本市として開催される「ミラノサローネ」は、デザイナーが自身の作品を発表できる展示場「サローネサテリテ」が設けられ、若手デザイナーの登竜門的な場所としても知られています。

Tokyo Midtown Award 2016 応募状況

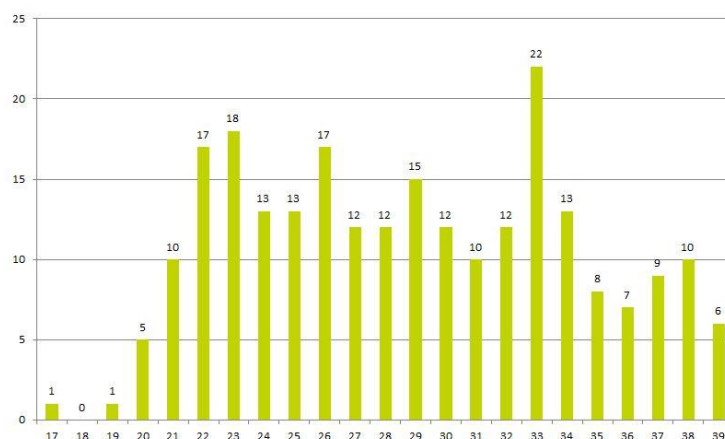
<アートコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比 (件)

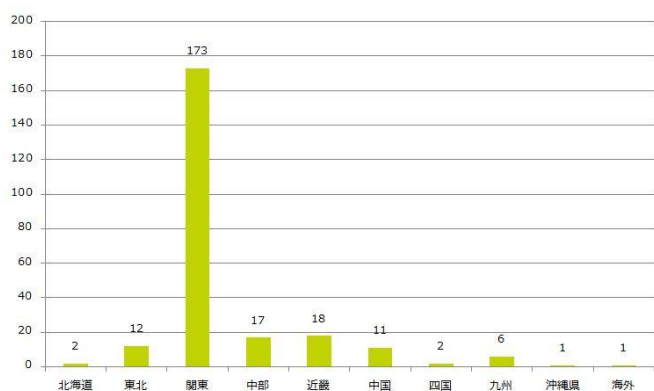


● 年齢分布 (件)

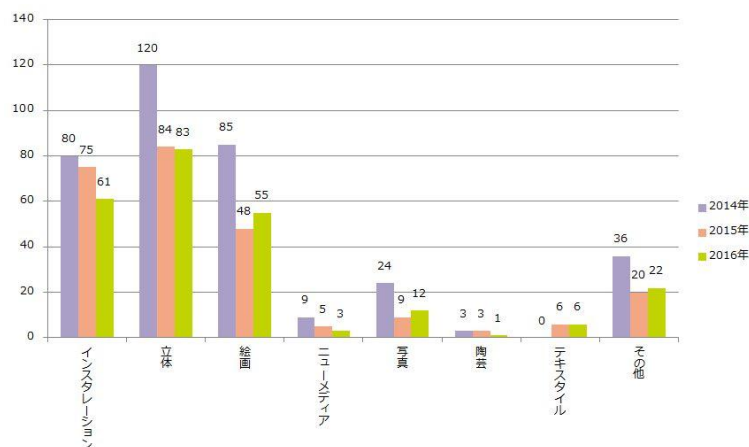
平均年齢 28.8 歳



● 地域別応募者数 (件)



● 分野別応募者数 (件)

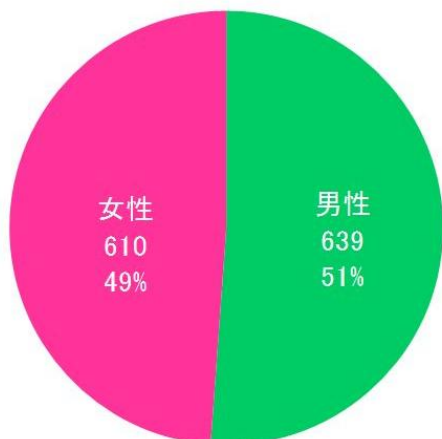


■ 応募者数…243 名(組)

■ 傾向…今年度の応募傾向としては、絵画が昨年を上回り、応募数を伸ばしました。また、応募者にテーマを自由に設定してもらい、作品提案をしていただきましたが、年々応募の質が高くなっており、特に今年は、「公共空間におけるアートとは何か?」、その問いにいかに向き合おうとしているかがうかがえるコンペとなりました。

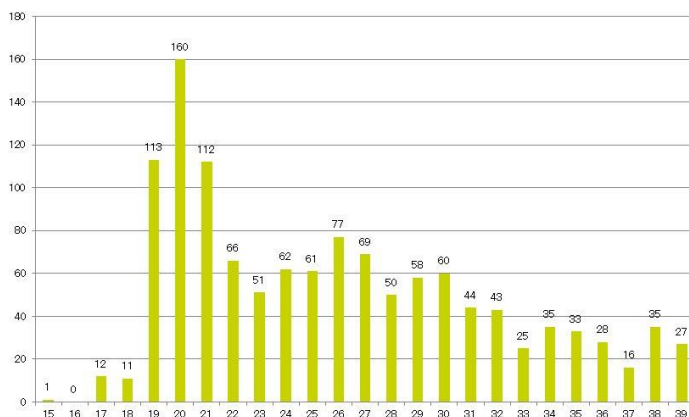
<デザインコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比（件）

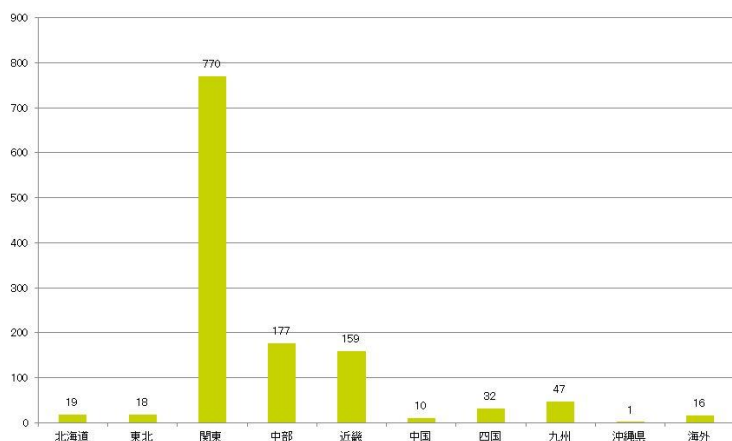


● 年齢分布（件）

平均年齢 25.9 歳



● 地域別応募者数（件）



■ 応募作品数…1,249 作品

■ 傾向…今年の<デザインコンペ>は「Anniversary」をテーマに募集し、1,249 作品の応募がありました。例年と比較して、カレンダーや時計など Anniversary を忘れないための提案と、キャンドルやラッピング、クラッカーなど Anniversary を演出するための提案を多くいただきました。プレゼントや食事に関わるものが多く、これはテーマからの素直な連想なのだろうと思います。

東京ミッドタウン・オーディエンス賞

10月14日(金)の授賞式にて発表する<アートコンペ>、<デザインコンペ>の受賞作品は、10月14日(金)～11月6日(日)まで東京ミッドタウン・プラザ B1 展示スペースにて展示されます。また、期間中、来場者の一般人気投票を実施し、「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。

結果は11月11日(金)に東京ミッドタウンオフィシャルサイトにて発表いたします。



▲2016 オーディエンス賞投票箱イメージ



▲昨年の投票の様子